

最初に出会った政治家、祖父幸之助

私の祖父、田中幸之助は、日本画家の奥村土牛と同じ明治二三（一八九〇）年に生まれた。

戦後、千葉県議会議員を二期つとめ、商工・経済関係委員会の、おもに委員長などを行っていたようだが、私が生まれた昭和三二（一九五七）年には、すでに議員を辞め地域の区画整理事業を手がけ、地下鉄東西線誘致に奔走している。

祖父幸之助は、その他数多くの仕事をおこなったが、特筆すべきは、人材を発掘することの見事さだろう。また、人の心をつかむ術は、目的達成に向けての執念からくるのか、心の奥底からの優しさなのかはわからないが、いまでも多くの人の心をつかんだまま放さない。

高台から見ると青な青空と入道雲、そして、高く組み上げられた海岸沿いの「やぐら」は、小学生になったばかりの私には忘れることのできない光景であった。千葉の浜から天然ガスを掘り当てようとボーリングをしているのだ。小さなテントの中で作業を見守る祖父の姿をいまでもはっきりと覚えている。

「政商」を目指し、明治・大正・昭和を駆け抜けた祖父の人生は、良し悪しは別として、ほとぼしるエネルギーと男のロマンを感じずにはいられない。

私が最初に知った、また、もっとも身近な政治家であったことは間違いない。祖父は昭和四四（一九六九）年三月四日、七九歳で他界している。大雪の朝、私が六年生の時であった。

「いま、やらなければならぬことをしろ！」と家族は祖父によくいわれたという。「優先順位を考えて無駄のないように」ということだろう。

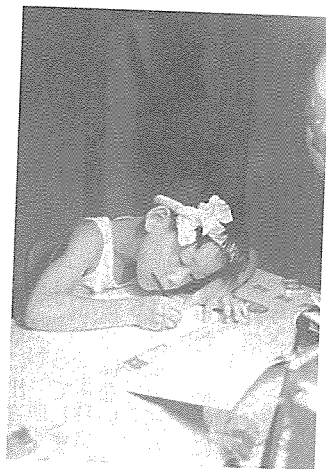
しかし、さらに知恵のある祖母は、身を粉にしてよく働いた。祖父同様、いやそれ以上に祖母に対しての語り草に出逢うことが多い。もっとゆっくり骨休めすればいいのに、三年で祖父に会いにいつてしまった。家族全員祖母のことを大切にしていたが、実は、私の父の本当の母親ではない。その父は私が二〇歳になるまで、本当の母親を探すことをせずに、成人した私を連れて千葉県夷隅郡を訪ねるのだが、残念ながらすでにこの世の人ではなかった。墓前に手を合わせ、閉じている父の目から一筋の涙が滲み出た。頬をつたい流れ落ちる父の涙を、私はこの時はじめて見た。

父は自分自身が、父親の後を継いで政治家になることはしなかった。選挙というも

のが、どれだけ身内に苦勞をかけるのかを肌で知っていることもあったのだろうし、また、早い時期から自分ではなく子どもの中で、誰かに政治をやらせたいと考えていたのかもしれない。

私は男二人、女二人の四人兄弟。

兄、乙（きのと）は、六歳年上で、祖父幸之助が、一筆で書ける名前を選んで「乙」と命名したという。また、自らの人生を良しとして、晩年で跳ね上がる「乙」という字型を好んだと聞いた。いずれにしても「乙」という一筆で一票という発想だったのだろう。



小学3年生当時の著者

兄が「乙」、弟の私が「甲（きのえ）」という珍しい兄弟は、互いに干渉することなく、それぞれの道を歩むことになるが、形の上では弟の私が祖父の後を継ぐことになっていく。

韓日湯交

昭和二六年より平成元年までの約四〇年間、わが家は銭湯を営んでいた。早い話が、私は銭湯の二男坊ということだ。内風呂もあったが、広い風呂が気持ちがいいのを知って、祖父の運転手をしていた「金さん」といつも銭湯に入りになっていた。祖父が他界し、私が高校に入ってから、一緒によく風呂に入った。「金さん」は一六歳の時に韓国から日本に来た在日韓国人で、本当に私のことをかわいがってくれた人だ。

父より一歳年上だが、いまにして思えば私とは友情で結ばれていたような気がする。二人のお子さんをもうけた奥さん、また再婚した奥さんも、韓国から日本に迎えた人であった。

ある時、海外にいる私の元に一本の電話がかかってき、金さんが心臓発作で息を引き取ったとの連絡が入った。金さんが楽しみにしていたお土産「約束の腕時計」を直

接渡することができず、骨壺を抱いて大泣きした、辛く寂しい思い出は、私にとつての韓日友好の礎となっている。風呂ではよく、背中を流し合ったものだった。

そんな環境から、一人の人間として、隣国である韓国とさまざまな障害を越えて、新しい時代を創り出していきたいと心から思っている。

ちなみに母は、銭湯に入りに行く私に対して「お客様の迷惑にならないように、いちばん低い場所のカラン（蛇口）を使うんですよ」と教えてくれた。下流ともいえるその場所には、お客の垢が流れて溜まる場所で、母は、「人のイヤがることができる人になりなさい。ましてお客様にそうするのは当然でしょう」と、なぜそこを使うかも教えてくれ、いまでも、頭ではなく体に染み込んでいる。また、銭湯ではいろいろな人との出逢いがあり、話しを聞くこともできる。はじめての人とも、たった一言を交すだけで、親しみが生まれる。実に不思議な空間である。そんな中で、私は少年時代を過ごした。

信念のままに——孤立のすすめ

今年、七四歳になる父は、私が子供のころ、

「本を読んでいるようではダメだ。電車に乗っても、ソバ屋に入っても、街での人の流れを観ても、ムダなことは一つもないのだ」

などと、ともすると人の学習意欲を失わせることを平気でいっていた。そのせいか私は、本は必要なポイントを探し出し、それ以外のところはあまり読まない。

そんな父だが、私が寝る時には必ず本を読んでくれた。

「本を読むのと、読み聞かせは違うのだろうか？」

子どもながらに、そう思っていたが、常に同じ本を何度も何度も繰り返し読んで読み、私が眠ってしまった後も読み続けていたという。

その本は「世界偉人伝」という分厚い本だった。エジソン、リンカーン、御木本幸吉、豊田佐吉、シユバイツァー、野口英世、ガンジー等々、誰でも知っているポピュラーな人々が、ずらりと並んでいた。わが息子にも、人の役に立ち歴史に残るような偉大な人間になってもらいたいと、父は思っていたのだろうか？

毎日読み続ける父は、「三つ子の魂百まで」のようなことをいっていたような記憶

がある。

いろいろなことで人の役に立った人がいるものだ。そして一つひとつの話から、時代や国は異なっても、いつでもどこにでも、似たような人がいたんだと思うようになり、いずれすべての話に共通するものを、子どもながらに、いや子どもだからこそ、心で受け留めていくのだった。

人の役に、また国の役に立つことをする人は、最初は誰も変人だといわれ、周りの者に相手にされずに辛い時期を過ごしている。しかし、それに負けることなく自分の信じることを貫いた者だけに、人の役に立つという使命が与えられる。

一〇〇人のうち九〇人の人が右だといっても、ただ一人、左に歩いていける強い意志の持ち主でいなければならぬ。

子どもながらにそのことを父に叩き込まれたような気がする。

どうやら、偉大な人間になってもらいたいという父の思いは実現しそうにないが、ただ私は、正しいと思うことを主張して孤立することを恐れない人間になった。逆に孤立を恐れ、人に迎合する政治家のことをリーダーではないと、心の中で軽蔑している。

政治家としての旅立ち

趣味と聞かれて私は一人旅と答える。わがままな私は一人で歩きながら、ものを考えることが好きだ。身体にもとても良く、どんなに考えてもストレスを溜めることはなく、胃も悪くしない。

とくに、悩んだ時は歩くに限る。

二七歳の時には、東京は日本橋から大阪城までの七五三キロメートル（歩測）を二三日間かけて歩いたことがあった。

この旅は、東海道五十三次を歩きながら、私が市民から議席を預かるに値する人間だろうかと考え、新しい道を決断することができればとの思いからであった。

しかし、この旅は一人旅ではなく、当時数えて七〇歳という伯父と二人での旅で、どちらかというと旅好きの伯父が、ぜひ自らの足で五十三次を歩いてみたいという夢のお手伝いであつたのかもしれない。

しかしその伯父は、祖父幸之助の秘書、また事業のパートナーとして活躍をしてくれた方で、私の旅の目標と無関係ではない人でもあったのだ。

健脚を誇る伯父が、最初に音を上げたのが箱根の山越だった。たいしたことはない

と思っていたのだが、東京を出てから三日目、もつとも疲れが出るころにこの山越となるのである。先に足のマメが破けたのは私のほうだった。

山路の途中、赤い毛氈が敷いてある茶屋で一休みしていると、伯父が急に、「政治家になることぐらいの決断がでせずに男の人生といえるか！」

と一言いうと、自分の膝をポンッと叩き、スタスタと山路を歩き出して行ってしまった。

歯を食いしばって歩き続ける伯父の姿が、何クソ、と生きてきた一人の男の生き様を私に見せてくれているようにも受け止められた。

この旅はさらに、私の進路を決定づける一人の男との出逢いがあったのだ。

旅も一四日目に入り、たまには別々に歩くことにしよう、その日の行程の伊良湖岬まで、伯父は内湾側を、私は太平洋側を歩くことにした。その時のことだった。

好天の中、どこまでも続く渥美半島の一本道を歩く。昼下がりで人気もまったくない。足のマメが痛い、久し振りに一人になったこともあって、すこぶる気分がいい。と、思っていると二〇〇メートルぐらい先に、一人の男性が急に現れた。ステテコ

に腹巻き、マルチーズを抱え、ジーっところちらを見ている。

「何か嫌な感じだな」

しかし、一本道では近づいていく以外、仕方がない。男は、そのまま動かない。すれ違う際に、私のほうから「こんにちは」と声をかけ、そのまま行き過ぎようとしたのだが、案の定、

「どこから来たんだ」

とぶっきらぼうに聞かれた。

「東京から大阪まで行く途中です」

少々立ち止まりそう答えると、男は嬉しそうに、

「そうか。大阪まで行くのか。俺は若い奴がやりたいことをするのが大好きだ。オイ！ ちょっと寄っていけ」という。

「いいから、いいから」

そういって、道路から少し入った貸家のような住まいに案内された。

「えらい人につかまっちゃったな！ せっかく一人で気持ちよく歩いていたのに」

四畳半の部屋には、昼を食べたままの卓袱台があり、犬はタンスの上におかれ、キャンキャンと吠えている。怪しい奴が来たとも思っているのだろう。

「何もないが、ミカンでも食べろ」

そういつて、一個のミカンを不器用に半分がちぎって私に渡そうとした。

「ありがとうございます」

そういつて半分のミカンを受け取る時、手の指がないことにはじめて気がついた。そのことを知ってか、男は少し自分のことを話しはじめた。

男性の名前は、飯田忠。長いことハツバの仕事をしてきたが、自分も例外ではなく怪我をしたという。額の一部がやけにへこんでいることも、すぐに気がついた。見せてくれた障害者手帳には、重度障害者一級、と記入され、頭蓋骨陥没、脊髄損傷、歩行限界二キロメートル、とも書かれていた。

私は言葉を失った。私と逢えたことを喜び、生き生きと話す飯田さんに、先程までの自分の気持ち申し訳なく思えて仕方がない。

「若いの、大阪まで絶対に歩いてくれよ。俺の分まで、歩いてほしいんだ」
うなずく私に、

「完走したら、写真を送ってくれ」

そういつてクシャクシャの五〇〇円札を私の手にねじ込んだ。

しばらくの間、素直な気持ちで飯田さんの話を聞いた後、「そろそろ行きます」と切り出し、失礼することとした。静かに待っていた犬がまた、キャンキャンと吠え出した。通りまで送ってくれた飯田さんに、感謝の気持ちを込めて挨拶すると、飯田さんは、

「アンチャン、日本の為に頑張ってくれ」

そういつて、力強く私の手を握り、何度も肯いていた。見えなくなるまで送ってくれた姿に、私も何度も、何度も、振り返り手を振った。いただいたミカンを一房、一房、丁寧に食べた。涙が出て止まらない。あふれる涙で景色がぼやけてはつきり見えない。

歩けること自体が幸せなんだ。俺はなんて幸せなんだろう。幸せに甘えちゃいけない。足の痛みなどもう忘れていた。

この旅は、出逢いと発見の旅。そして、私にとってまさに議員としての旅立ちでもあった。

新しい名前

いよいよ市議會議員選挙に挑戦することとなって、選対会議（選挙対策会議）なるものを開いた。

集まってくれたメンバーは、二〇代後半から三〇代前半の、ほぼ私と同じ年齢ばかり一〇人程度であったが、何から手をつけていいのか誰もわからない。

それでも、いろいろ出る意見の中で、田中 甲（たなかきのえ）という名前を街で聞いてポスターを見た時に、すぐに一致するだろうか。「わかりづらい」との意見が出てきた。甲を平仮名で「きのえ」に替えるのか、あるいは、甲（きのえ）を「こう」と音読みにするのか、私は決断を迫られた。

約二八年間、「きのえ、きのえ」と呼ばれてきたその名前を変えるのだから、まったく抵抗がないといえれば嘘になる。

が、しかし、政治家としての新しいスタートを切るに当たって、田中 甲（たなかこう）とすることにした。誰もが読みやすく、書きやすいというのがその理由だ。

もともとこの名前は左右対称で、裏表がない形の特徴がある。その上、キャッチコピーに「こう！」と決めたら田中 甲（こう）というアイデアを、後に青年部のリー

ダーを務めてくれることになる石井さんが与えてくれたのだった。

マイク一本で……

「庵丁一本」とは歌でお馴染みだが、長野県の参議院補欠選挙の打上げで、菅直人さんが私のことを、「マイク一本で議員になった、田中 甲 君です」と紹介してくれた。多分口先で議員に当選した、という皮肉なのだろうが、聞いている人にはわからない。ニコニコ笑って私は挨拶をはじめた。そのことはまだ、記憶に新しい。

確かに、選挙区での演説は随分とおこなってきた。

八七年の市議會議員選挙で当選し、議席を預かった直後から、ほぼ毎日のように街頭、街頭に立ち、議会報告をおこなってきた。その回はゆくに二〇〇〇回を超える。

早朝の駅での演説は九〇分を基本とし、夕刻は三〇分程度で二駅を廻る。また、スパーの前や街中でも一〇分程度の報告を繰り返し繰り返しおこなってきた。

私はあまり自分の名前をいわないのだが、それでも顔と名前を有権者は覚えてくれる。また、街頭演説はやればやるほど政治家としての最大の武器、「語り」に磨きを

かける機会にもなる。

国会議員になると、自分の選挙区に限らず、都内遊説をおこない、また、地方の新人の応援にも随分と駆けつけてマイクをもっている。これもまた、私自身の武者修行として苦にはならない。

演説では、話は長すぎてはいけない。簡潔にして「だからなんなんだ」ということを、ハッキリ伝えることが大切だ。

また、おしつけがましい自己満足的な話はいけない。

長い間、先輩政治家が有権者に拒否反応をもたせてしまうような、デリカシーのない演説を続けたせいで、いまでは、声が聞こえてくるだけでほとんどの有権者が耳に戸を建ててしまう。

私は繰り返す街頭演説の中から、次の二つのことを注意するようにしている。

その一つは、「ゆつくりと心で語る」ことである。

もう一点は、「本音で話す」ということだ。

つくり話はすぐバレる。体裁だけを整えて美辞、麗句を並べても、相手の心には届かない。本音が有権者の閉ざされた戸をノックして、様子を見ようとして少し開けて

くれた隙間に、ゆつくりと心で語る話を染み込ませてゆくのだ。

また、生きた話は机上では生まれえない。実際に行動してそこから問題の糸口が見えてくる。

傘になれ三

二〇〇〇回を越す街頭演説の中には、忘れることのできない出来事があった。

つばを吐きかけられた時は、悔しかったがぐつとこらえて我慢をした。「うるさい！」といわれ、議員バッチをむしり取って投げつけられたこともあった。

怒られるには理由がある。忙しい早朝にマイクを使って話しているほうがいけない。配慮が足りないのだ。辛くとも、実際に行動する者だけが与えられる得難い経験と受け留め感謝しなければならぬ。

その日も、「ゆつくりと心で語る」を心がけ、目礼をしながら話をしていた時だった。

気がつくとい人の男性が近づいてくる。

(いけない……。つい夢中になって何か気になることをいってしまったのかも)

れない)

近づいてきた中年の男は、

「これを使え」

といて、使っている自分の傘を私につき出した。

気づかずにいたのだが、先程から雨が降り出してメガネに水滴がつき、肩や胸を見るとかなり濡れている。

「あつ、ありがとうございます。でも、これを使えば貴方が濡れます」と遠慮してというと、男は、

「いいから、使え」

といてさらに傘をつき出してきた。

次の瞬間、言葉には現せないものが胸の中に込み上げてきた。

「ありがとうございます。使わせてもらいます」

そう言って頭を下げ、傘を受け取ると、男はすぐに行ってしまった。

込み上げてきた熱いものが胸から溢れ、身体中を駆け巡っている。物でも金でもない、心のプレゼントを戴いた。マイクを通して次に出た言葉は「ありがとうございますま

す」だった。マイクを通してお礼をいうつもりはなかったが、その言葉以外探せなかった。

私はその傘を、大切にしてお礼を置いてある。たまに広げては、新人にこの話をする。

そしてこう思う。

いつかこの傘を貸してくれた人のように、つつけんどんで、しかし温かい政治家になりたい。

辞任届

国会の議席を預かるようになってから三度目の夏であった。誰からも順調に議員活動をおこなっていると思われるが、そんな中、突然一五連の手紙が届けられた。後援会の中心的役員からの辞任届けであり、その手紙の内容はすべて、都合により役員を降ろしてもらいたい、というものであった。

理由は書かれていないが、私にはわかっていった。もしかしたらこういうことになるかもしれない、と思っていたのだ。

多少予測はしていたものの、ショックを受けないわけはなく、とても辛い時期がはじまったことはいうまでもない。

ひとりになった私は約三か月間、悩み苦しんだ末、一五通の辞任届をすべて受理する決心をした。

正直、誰にも相談することができない状態での決断となった。

祖父の代から応援してくださっている方々からは、田中は何と恩知らずな男だ、といわれ、非難の声が出ていることも耳にしている。

第四一回総選挙を目前に、後援会解散を余儀なくされた私を、新聞、週刊誌をはじめ、所属していたさきがけの関係者までもが、泡沫的種類の候補者として見ていた。

その後、民主党立ち上げに加わった私は、自分自身にさらに高いハードルを課して、業界、団体、労働組合、宗教団体の推薦をお断りして、市民参加のボランティア選挙で小選挙区の戦いに挑むこととしたのだった。

誰も私が当選するとは、思ってもいなかった。だが私は当選した。

一九九六年解散総選挙で、有権者が私に再度議席を預けてくれたのだ。

当選の喜びと同じだけの苦悩が残った。元後援会の方々に、人間田中甲として一生宿題を背負った、と思ったのだ。私の代では償いきれないかもしれない。いまでもそう思っている。

開票の夜、随分人が少なくなった事務所を出て雨に打たれていると、犬の散歩の途中で立ち寄ってくれた人が、犬を撫でながら笑いかけ、私にこういつてくれた。

「日本も捨てたもんじゃない。この戦い方を理解して君を勝たせてくれたのだから」。